学位論文要旨

藩儒の教育活動とその継承

― 吉村家三代を中心に ―

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻　教育学分野

D175554　　井上　快

１．研究の目的・対象・視点

本研究の目的は、藩儒の教育活動の実態を、その受け手との関係から解明することである。加えて、藩儒の教育活動が近代にいかに継承されたのか明らかにする。なお、ここでの教育活動とは、講義や会読といった学問教授に加え、塾生が学問を行うための支援を想定している。

藩儒とは、儒学的知識の所有によって、藩に取り立てられた学者のことである。熊沢蕃山のように好学な藩主によって早くから重用された例もあったが、その数が激増したのは18世紀後半に入ってからである。彼らは一芸事の師匠に過ぎず、藩政への参与も限定的であった。そのため、当該期の藩儒たちは教育活動を自らの使命として位置づけ、教育活動を通じた治国安民を目指した。

近世後期以降の藩儒については、主に思想史研究の立場から、彼らの教育論が解明されている。しかしながら、彼らが教育者として如何に教育活動にあたったという問題は、依然、未解明のまま残されている。では、藩儒は如何に教育活動を行っていたのだろうか。

注目するのは、幕末に広島三原藩儒をつとめた吉村秋陽（1797-1866）とその後裔たちである。秋陽は佐藤一斎の門下で右に出るものなしと称されるほどの人物であり、広島三原藩校明善堂や広島屋敷内の講学所朝陽館につとめる傍ら、家塾咬菜塾を運営した。斐山（1822-82）は秋陽を継いで明善堂、朝陽館で人材育成に従事し、咬菜塾でも学問を教授した。彰（1853-1908）は明治7（1874）年に教員養成校白島学校に入学、小学校教員第一等となり、小学校や広島県尋常師範学校に奉職した。

吉村家三代に関しては、荒木龍太郎の研究が存在する。荒木は吉村秋陽に関する史料を翻刻、紹介しつつ、陽明学の思想体系の中で秋陽の独自性を位置付けている。しかしながら、荒木の研究では秋陽を陽明学者として把握することに力点が置かれており、吉村家の家業とも言うべき教育活動に関する言及は見当たらない。加えて、研究対象が秋陽に限定されており、斐山や彰については分析が及んでいない。

吉村家三代に関しては353点674冊88通にも及ぶ大量の史料が残存しており、九州大学附属図書館に吉村家文庫として所蔵されている。本研究で使用するのは、日記、講義記録、書簡、学問観を示す史料の4つである。

本研究では、吉村家三代の教育活動を問う視点として、受け手に注目する。学問が特権階級の専有物ではなくなった近世日本では、学問の担い手たちは、その受け手との関係の中で学問を展開するようになった。こうした時代において、「学問なるものを語る者は、受け手に誰を想定しているのか。学問なるものを語ることによって、説き手は受け手をいかなる方向へと教導しようとするのか。また、語ることによって、説き手は受け手といかなる関係を築き上げようとするのか。そして、語ることによって、説き手は、いかなる負担を自らに背負い込んでいくことになるのか」（高野 2015、16 頁）という高野秀晴の研究課題は、近世教育史研究において極めて重要な視座となる。本研究では、高野の研究に多くを負いながら、実際の受け手との間で展開される藩儒の教育活動を検討したい。

なお、藩儒には様々な受け手が存在した。侍講の場合、藩主やその世子が受け手であり、藩校では藩士たちが受け手に該当する。また地域の人々から依頼を受けて個別指導を行うことがあり、家塾を運営して塾生に対しても教育活動を行っていた。本研究では、多数存在する受け手のうち、家塾の塾生に注目する。

２．先行研究の整理と課題

藩儒は、従来、日本思想史研究の分析対象であり、個々の思想的営為については分厚い蓄積がある。ただし、ひと

たび近世教育史研究に目を向けてみると、藩儒が積極的に取り上げられてきたとは言い難い。その要因は以下の 2 つ考えられる。

第一の理由は、近世教育史研究が永らく近代学校教育の淵源を探求してきたことである。石川謙は、昭和初期の師範学校において日本教育史学が軽視されていることに危機感を持ち、そうした状況を打破すべく「明治の教育が江戸の母胎の中に発育しつゝあつた経過を明らかに」することを研究課題に据えた（石川 1929、7 頁）。1980 年代までの近世教育史研究は石川の課題意識を共有して進展した。

これらの研究では、近世における教育活動の中から「狭い鎖された封建主義・儒教一辺倒主義から解放され、封鎖的藩国主義の殻を脱し」ていた点を発見し、「近代教育文化の黎明」として強調してきた（笠井 1970、2104 頁）。しかしながら、藩儒は儒学的知識の所有者である。そのため藩儒については、彼らが担った職務や身分について言及がある程度で、積極的な研究対象とはなり得なかったのである。

藩儒が研究対象から零れ落ちた要因の 2 つ目として、江戸時代が学習社会であったと見做されていることが挙げられる。こうした主張は、明治時代以前の辞書のなかに「教」よりも「学」に関わる文字が多いことを指摘した中内敏夫（1973）や学習者の主体性を重視した貝原益軒の教育観を「学習法的教育観」と名付けた江森一郎（1990）によって定着した。学習社会においては学習者がいかに学んだかが問題であり、教育者がそこで如何に教えていたかは解明されるべき課題とならなかったのである。

本研究では、これまで先行研究で看過されてきた藩儒に着目して、その教育活動の実態を明らかにする。藩儒に注目することで、以下の 3 点で近世教育史研究上に新たな知見をもたらすと考える。第一に、頂点思想家の思想史研究やオフィシャルな制度史研究では把握できない、教育活動の実態を明らかにできることである。第二に、家塾という、藩校とも私塾とも異なる学舎の特質を教育者の立場から明らかにできることである。第三に、教育活動の近代への継承を検討できることである。従来の近世教育史研究では、明治期を時代区分に包括しておらず、近代教育への継承を演繹的に導き出してきた。本研究では、教育者に焦点を当てることで、彼らの家業が近代に継承されていく過程を具体的に追うことができる。

３．研究の目的・対象・視点

第１章　「読書人」育成を目指した学問講究－塾生の政治志向と向き合う－

第 1 章では、幕末期の政治的な議論、活動の流行を念頭に置いて展開する秋陽の講義を明らかにした。

黒船来航により国中が「騒擾」となり、志士たちの過激な政治的活動が遠近に見えていた。庶民までもが幕府や藩の政治について口にする事態は、身分制社会の崩壊として秋陽の目に映った。秋陽にとって、塾生を政治的な議論から引き離すことは喫緊の課題であった。そして秋陽は、テキストの真意の解明それ自体に価値を置き、ひたすら学問講究に取り組む「読書人」の育成を目指して教育活動を行う。

安政 4（1857）年から翌年にかけて咬菜塾で行われた『孟子』の講義記録には、庶民層を学問講究に誘う様子が見て取れる。『孟子』離婁章句下 2 は、子産という為政者が冬の川を渡渉している者を哀れに思い自分の乗り物に乗せたことに対して、孟子が為政者の行為でないと批評する内容である。この章について咬菜塾では、「子産ノ様ナ政ヲスル人」にとっては「ヨキ㆓ニテナラヌ」と『孟子』本文の論旨を簡潔にまとめている。だが、続けて「吾輩ニ在テハ甚タヨキ㆓也」として、為政者である子産と政治を担う立場にない秋陽たちとでは善徳が異なると解説を加える。行為の良し

悪しは「其人ノ位」に「相応」するものだと述べ、身分や立場に応じた行為を塾生たちに示すのである。

では、政治を担う立場にない庶民層の塾生たちにとっての「相応」の行為とは何か。秋陽は講義中、学問の講究こそ彼らに「相応」の行為として示す。『孟子』告子章句下 15 には舜や傅説など天子や宰相が登場し、彼らの「大任」（本文の文脈では天下を治めること）についての議論が収められている。この章について咬菜塾では、過去の優れた学者を継承し、後学を振興することもまた「大任」であると解説されている。秋陽は塾生たちを政治ではなく学問講究の道へと誘うのである。

「読書人」の育成を目指した咬菜塾の講義は、藩士が通っていた朝陽館の講義と比較して 2 つの特徴があった。1 つ目の特徴は、解説箇所が多く、語句レベルでの解説にも力を注いでいたことである。その際は『孟子』本文の主旨とほとんど関係のない語句の読み方にも解説が及んでいた。2 つ目の特徴は、朝陽館の講義が『孟子』の内容から教訓や徳目を導き出すことに注力していたのに対し、咬菜塾では登場人物の発言の真意が推察されるなど、『孟子』本文のコンテキストの解明が目指されていたことである。

コンテキストに留意することそれ自体は当該期において珍しい経典解釈の方法ではなかったが、重要なのはこの講義方法が朝陽館で採用されなかったにもかかわらず、咬菜塾では採用されていたことである。庶民層の塾生を「読書人」として育成するための、彼らを学問の道へと誘う講義であったと考えられる。

第 2 章　塾生の多様化に伴う教育活動の変容－多様な学問欲求と向き合う－

第 2 章では、塾生の学問欲求や学習レベルに対応するかたちで変容する咬菜塾の教育活動の内実に迫った。咬菜塾では「読書人」の育成を目指して講義を行っていたが、学問の講究には学習者中心の読書が不可欠であった。そのため幕末維新期の咬菜塾では塾生の興味、関心を尊重した教育活動を行っていた。

咬菜塾の塾生の出自は安政年間を前後して大きく異なる。嘉永年間以前の咬菜塾には、各地の藩儒が多く入塾していた。彼らは佐藤一斎のもとへ遊学するなどして陽明学を修めており、中には、陽明学の修学を期待して門人を咬菜塾に送り出す人物もいた。一方、安政年間以降の咬菜塾には、石見国をはじめ、近隣の諸国から庶民層の入塾が相次ぐようになった。彼らの多くは各村のリーダーや医師であったが、藩命によって入塾する者もおり、当該期の咬菜塾には実に多様な出自の塾生が混在していた。

塾生の出自の多様化するにともなって、咬菜塾では授業で扱うテキストが多様化し、また個別教授も増加していった。嘉永年間以前の咬菜塾では、四書五経など儒学の基本的なテキストを扱っていたが、安政年間以降の授業では、歴史書や『小学』の講釈が行われるようになる。秋陽は経学者を自負しており、塾主の専門分野よりも塾生の関心が尊重されていたことが分かる。この点については、塾生が在塾中に購入した書物からも確認することができ、秋陽が酷評する書物を塾生が購入する場合があった。

嘉永年間以前の咬菜塾ではほとんど見られなかった授業形態である個別教授が、安政年間以降多く見られるようになる。個別教授では、その時期に扱われていないテキストの講釈が行われており、塾生の学問欲求の多様化に対応するために行われていたことが分かる。また入塾して間もない塾生も個別教授を依頼することが多く、秋陽や斐山は塾生の学問欲求や学習レベルに対応して教育活動を行っていた。

本章では、塾生の出自や関心に対応するかたちで教育活動が変容していく様相が明らかになった。

第3章　塾生に対する支援－塾生の学習環境と向き合う－

第3章では、退塾生に対する秋陽と斐山の学習支援を追跡した。近世を通じて遊学は盛んに行われていたが、あらゆる事情のために志半ばで退塾する場合が多かった。藩儒は、塾生たちが退塾後も学問を継続できるよう支援していく必要があった。

江戸時代、地方在住の人々が京都や大坂の書肆から書物を購入するには藩儒の取り次ぎが必要であった。そこで秋陽は、咬菜塾の塾生たちが退塾した後も読書を継続できるよう、自身と関係の深い大坂の書肆秋田屋に対して、彼らの注文に対応するよう依頼していた。また幕末に書物の価格が高騰すると、秋田屋に価格を抑えるよう求めていた。また秋陽は、退塾後の塾生のもとに赴き、講義を行っていた。塾生が退塾した後も学問の道に邁進できるよう、また彼らの厳しい学問環境を考慮し、藩儒は教育活動を展開していたのである。

第4章　明治前期における塾の展開－時代に即した学問欲求と向き合う－

第4章では、明治前期における咬菜塾の実態に迫った。咬菜塾では、明治5（1872）年以降に塾生数が急増する。彼らの多くは師範学校への入学希望者であり、その下準備咬菜塾で学んでいた。当該期の社会には「漢学者でなくては子供同様」という気風があり、同じ教員でも漢学者とそうでない者とでは月給が異なる場合があった。こうした背景により、教員志望者が咬菜塾で学ぶようになっていた。

教員志望者、言い換えれば「読書人」を目標としない塾生の増加により、咬菜塾では以前にも増して歴史書の学習が行われるようになる。こうした事態を斐山は「学問之浅露」だと嘆いている。ただし、咬菜塾では「読書人」の育成を目指しており、そのため塾生の関心に沿った読書を尊重していた。たとえ歴史書であっても塾生の学問欲求として受け入れざるを得なかったのである。

様々な改革が行われた明治前期の咬菜塾であったが、塾生の関心に沿った読書という理念は堅持し続けた。たとえ歴史書の読書が塾内で流行しようとも、斐山は「万分之一」でも賛同してくれる「同志」の登場を待ち続けたのである。

第5章　師範学校への継承－生徒の将来と向き合う－

第5章では、明治前期の広島県尋常師範学校における彰の『論語』講義について、留正書院（もとの咬菜塾）の講義との比較を通じて検討した。その結果、尋常小学校の教員を目指す師範学校の生徒に対応するかたちで展開される彰の講義の様相が明らかになった。

彰は、児童が学問に没頭できるよう、負担のない学習を主張していた。そして、師範学校における彰の講義は、塾での講義と比較して負担の少なくする工夫がなされていた。

まず重要なのは、幕末以来行われてきた吉村家の教育活動を彰が継承していることである。広島県尋常師範学校における彰の講義を見ると、秋陽の講義記録や留正書院における講義との共通点を多く確認できる。幕末以来吉村家で継承されてきた家学が明治20年代の師範学校においても実践されていた様子がうかがえる。

ただし、広島県尋常師範学校における講義は、吉村家の家学を継続しつつも、それを簡略化したものであった。留正書院における講義は、一斎の注釈に加えて、中井履軒らの学説が提示されている点に特徴があった。その際は彰が支持する学説を明言しない場合もあった。一方の広島県尋常師範学校では、提示する学説が減少し、また各章の冒頭

に要点が提示されるなど、明快な解説が行われていた。師範学校における彰の講義が、明治前期の留正書院の講義を土台としつつ、それを簡略化したものであったことが明らかになった。学問講究を目指した留正書院と比べて、師範学校では、明快で負担の少ない講義が行われていたのである。小学校教員になる生徒に向けて、彼らに有用な講義を実践していたのである。

研究の成果と今後の課題（終章）

本研究では藩儒の教育活動について、受け手との関係から議論を進めてきた。幕末維新期の咬菜塾には多様な塾生がおり、秋陽、斐山は彼らと向き合いながら教育活動を展開していた。具体的に言えば、当該期の塾生には政治志向を持つ者、歴史書に関心がある者、厳しい学習環境の中で学ぶ者がいた。吉村家の藩儒はそれらを尊重しながら、ときには上手くコントロールしながら学習を支えていた。

藩儒に注目すること自体、これまでの教育史研究では本格的になされてこなかった。本研究の第一の意義は、これまで等閑視されてきた藩儒を研究対象として見出したことにある。

藩儒に注目することで、得られた知見は次の 3 点である。まず、近世における教育活動の実態を明らかにすることができた。秋陽は眼前の政治問題に関わらず学問に没頭する「読書人」を構想し、「読書人」育成を目指して講義を行った。身分制秩序の再建を目指した教育活動の一つの展開であった。

次に家塾の特質を教育者の立場から明らかにできた。藩儒は家塾において学習者の政治志向や学問欲求など常に向き合わねばならなかった。結果的に藩儒は、学習者を如何なる方向へと導くのか、如何に教えるのか、という難問に向き合うことになった。家塾は、藩儒の教育者としての自己形成の場であった。

最後に、近世の教育活動の近代への継承を検討することができた。近世に展開された教育活動は、家業として、彼らの後継者らによって継承されたのである。

史料及び主要な参考引用文献

・宇野哲人ほか監修『陽明学大系 11　幕末維新陽明学者書簡集』明徳出版社、1971 年。

・吉村家文庫『読我書楼長暦』（九州大学附属図書館所蔵）

・吉村家文庫『白斎先生日暦』（九州大学附属図書館所蔵）。

・吉村家文庫『斐山先生日暦』（九州大学附属図書館所蔵）。

・吉村家文庫『明治十四年一月　留正書院規則』（九州大学附属図書館所蔵）。

・荒木龍太郎・荒木見悟『叢書・日本の思想家 46　吉村秋陽・東沢瀉』明徳出版社、1982 年。

・石川謙『日本庶民教育史』刀江書院、1929 年（国立国会図書館デジタルコレクション参照）。

・海原徹『近世私塾の研究』思文閣出版、1993 年（初版 1983）。

・江森一郎『「勉強」時代の幕あけ』平凡社、1990 年。

・笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』下、吉川弘文館、1970 年。

・高野秀晴『教化に臨む近世学問―石門心学の立場―』ぺりかん社、2015 年。

・辻本雅史『近世教育思想史の研究―日本における「公教育」思想の源流―』思文閣出版、1990 年。

・中内敏夫『近代日本教育思想史』国土社、1973 年。